

を実証するためには、いかなるエヴィデンスがさらに必要であろうか。

2 通勤兼業所得の増大と地代発生との関連について

両者間の因果関係が必ずしも明確でない。通勤農外所得は、はたして水田に対する需要を大きくするのであろうか。その場合、水田購入の需要と小作希望者の増加の両方を考えねばならないのか。

3 地代発生と小作地の需要と供給

地主・小作関係が成立するためには、土地を貸したいという人と、借りたいという人とが共にいなくてはならない。DDで土地を借りたい人が増えたのは、人口増のためと一応考えられる（人口増は、自然増と移山人口の低下とによって決まる）。一方、貸したい人が増えたのは、小作料目当ての商業的地主の発生のせいではなく、農外収入（必ずしも在村農外収入だけではなく）の機会増大と考えられる。その場合、農外収入が非常に安定しておれば、あるいは、遠隔地への半永久的移住を伴うのであれば、農地を売却こそすれ、地主化することはないかも知れない。しかし、DDでは、農外収入が安定的でなく、かつ、在村の農外収入が可能であるために貸し手が増えたと思われる。

4 稲作・畑作の差

以上の1, 2, 3の論点は、すべて稲作を考えた場合である。畑作の場合には、リカードの理論は、ほぼ適用されると思われる。すなわち、耕境拡大によるDD農地の相対的有利化、経済距離の短縮の効果などである。

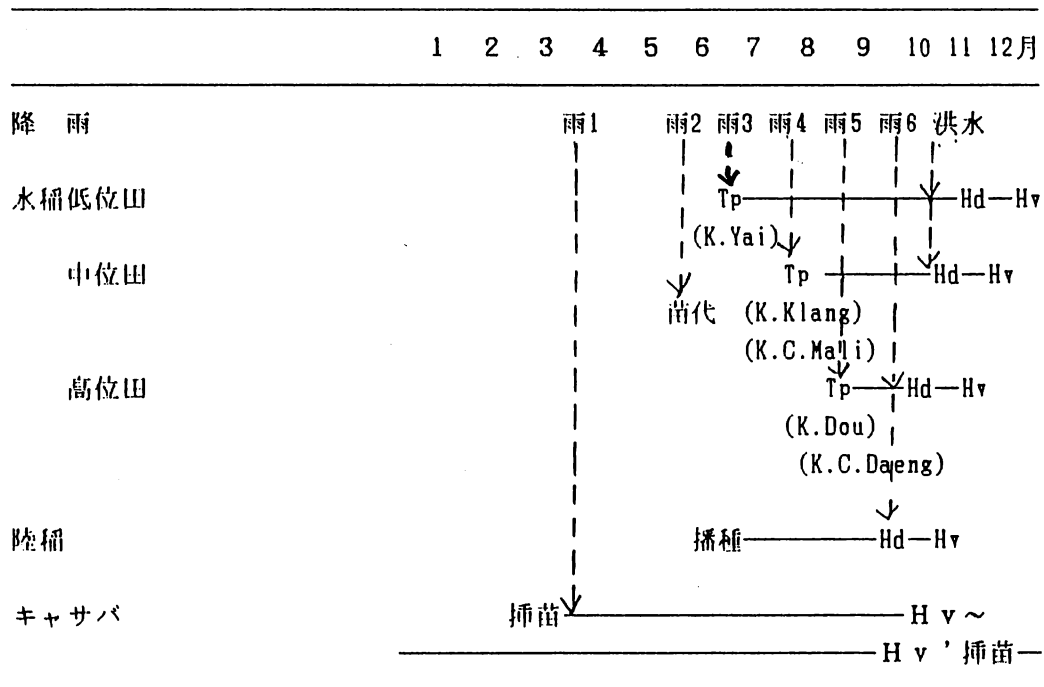
5 リカード理論の限界

余剰生産を伴わない地代の発生、農外収入の増大による地代の発生は、リカードが考えてもみなかったことではなかろうか。DDにおける地代の発生をリカード理論の枠外で説明せねばならないと思われる。であるとするならば、水野時代に地代がなかったことも、リカード理論にない事象で説明することを考えてもよさそうと思われる。

《 1 5 - 3 》 収量変動モデルへの手掛り

収量変動のシュミレーション・モデルを作成することが農学班のこれからの仕事の重要な中心的テーマであり、また、それが実現できれば、社会・経済的データとの総合にも大きく貢献しうるのであろうことは、すでに何度も指摘されている。

このようなモデルの極く初歩的な最初の試みとして、3年間の豊凶を地形区別に降雨と関連させて考えてみた。



Tp; 田植, Hd; 出穂, Hv; 収穫

作期、品種、地形区分との関係を上図のように一般化できるとすれば、降雨と作況との関係は、次のように説明できる。

- 2524年 雨6と洪水なし。→ ほとんど作付でき、高位田早魃、低、中位田良収
- 2525年 雨4、5、6なし。→ 低位田のみ植付、洪水あり → 冠水 → 無収
- 2526年 雨1なし → キャサバ枯死 → オカボ拡大
 雨2なし → 苗代遅れ、田植遅れ
 その後の雨順調 → すべて作付可能
 洪水なし → 大豊作、収穫の遅滞